

[資 料]

トランポリン指導者の実態に関する調査研究

山崎博和*・伊藤直樹*・藤田一郎**

(平成9年10月13日受付, 平成9年12月12日受理)

The Study of Investigation Related Trampoline Instructor
on the Actual Situation

Hirokazu YAMAZAKI, Naoki ITO and Ichiro FUJITA

The purpose of this study is to grasp the actual situation of trampoline instructor who coach trampoline in many parts of Japan, to get fundamental data to bring up trampoline instructor on JTA (Japan Trampoline Association).

The results were summarized as followed: Comparison between "recreational orientation" and "competitive orientation" of JTA.

1) Regarding a sexuality, "competitive orientation" have a large number of male instructors, "recreational orientation" have a large number of female instructors.

2) Regarding years of instruction, "recreational orientation" is shorter than "competitive orientation".

3) Regarding the competition experience, "competitive orientation" have more play experience than "recreational orientation".

4) Regarding the level of instruction subject people, the clubs "recreational orientation" have a tendency not to attend "competitive orientation".

5) Regarding the number of instruction in a week, "recreational orientation" have tendency of less instruction.

6) Regarding the emphasis of instructions, both instructors emphasize the enjoyment. However, the rate of "recreational orientation" is higher than "competitive orientation". Skill is emphasized "competitive orientation".

Key words: Trampoline, Instructor, Recreation, Competitive orientation

キーワード: トランポリン, 指導者, レクリエーション, 競技者育成

I. 研究の動機と目的

(社)日本トランポリン協会(以下, JTA と略)が日本体育施設協会と共催で第1回のトランポリン指導者認定講習会を開催したのが昭和47年のことである。トランポリンの創始者であるJ・ニッセンらによって日本に紹介されてから13年後のことである。

そして第1回目の指導者認定講習会から23年が過ぎた平成7年3月, 当面の目標であった日本トランポリン協会の社団法人化を成し遂げることができ¹⁾, 今後ますます飛躍が期待されるようになってきている。

しかし, 現在までにトランポリンの指導者に関する研究は少ない。そこで本研究では, 社団法人化を境として

指導者に関してもより充実した指導内容が期待されるためにトランポリンを各地域にて指導を行っている指導者の実態を広く把握するとともに, 指導志向別の比較からトランポリンの指導者の今後の指導者としての養成, 育成の基礎的な資料を得ることを目的として調査研究を行うものである。

II. 調査の手順と方法

1. 調査の手順と方法について

本調査は, 日本トランポリン協会に平成7年度分として団体登録を完了しているクラブ等で指導活動を行っている指導者を対象に平成7年7月上旬に全国214団体

* トランポリン研究室, ** 北見工業大学

の代表者への郵送託送調査法を用いて調査を実施した。調査用紙に関しては、(財)日本体育公認地域スポーツ指導者に対して1993年に行われた「地域スポーツ指導者の現状と課題及び資格効果等についての調査研究報告」²⁾で用いられた調査用紙を元にトランポリン指導者に関する独自の質問項目をヒアリング調査・プレテストから得られた結果をもとに付け加えたものを用いることにした。

ヒアリング調査・プレテストに関しては、ともに平成7年度分としてJTAに団体登録を行わずに活動を行っている東京都内のクラブで現在指導を行っている指導者とこれまでに指導の経験がある指導者を対象として行った。

集計の方法は、指導者の指導志向の違いについてクロス集計を行い、有意差検定についてはカイ二乗検定を行うものとする。

2. 標本の抽出について

標本の抽出に関しては、JTA要覧に団体登録として記載されているクラブ・チームの代表者に、電話にて現在そのクラブで常時指導に携わっている指導者の有無をうかがい選出した。

そして、筆者らは人数分の調査用紙と返信用封筒を同封し代表者に郵送した。

返却に関しては、各指導者自身で調査者に郵送にて返却をしてもらった。

3. 配布数と回収数

今回の調査についての配布数と回収数については、調査用紙配布数578(100.0%)、回収数347(60.0%)、有効標本数341(59.0%)となった。

III. 調査結果

1. 基本的属性

まず初めに、対象者の「性別」に関して特徴的なものが、男性の142(41.6%)に対して女性の194(56.9%)指導者の占める割合が高い結果となった(表1参照)。「年齢別構成」では、「35~44歳」までの指導者が50%近くを占めていた(表2参照)。

表1 性別

		％
1. 男性	142	41.6
1. 女性	194	56.9
N.A.	5	1.5
合計	341	100.0

職業」での特徴として注目すべき点として、主婦の占める割合が30%を超えているという点である(表3参照)。

指導者自身の「大会出場経験(競技レベル)」に関しては、35%近い指導者が大会等の出場経験が全くないというところに特徴的な傾向を示した(表4参照)。

表2 年齢

		％
1. 25歳未満	24	7.0
2. 25~34歳	60	17.6
3. 35~44歳	154	45.2
4. 45~54歳	85	24.9
5. 55歳以上	13	3.8
N.A.	5	1.5
合計	341	100.0

表3 職業

		％
1. 専門的・技術的職業	79	23.2
2. 管理的職業	19	5.6
3. 事務的職業	47	13.8
4. 販売的職業	19	5.6
5. サービス業	17	5.0
6. 保安的職業	2	0.6
7. 農林漁業	2	0.6
8. 運輸・通信業	2	0.6
9. 製造・建設業	34	10.0
10. 主婦	104	30.5
11. 学生	10	2.9
12. 無職	0	0.0
N.A.	6	1.6
合計	341	100.0

表4 指導者の競技レベル

		％
1. 国際大会	22	6.5
2. 全国大会	37	10.9
3. 東・西日本大会	26	7.6
4. 都道府県大会	73	21.4
5. 市町村大会	61	17.9
6. 出場経験ナシ	117	34.3
N.A.	5	1.4
合計	341	100.0

「指導歴」に関しては、10年以上の長期に渡って指導に従事している指導者が30%を超えている(表5参照)。

2. 指導者の意識

指導活動を行うに關しての「指導志向」は、レクリエーションスポーツ志向で指導に従事している指導者が50%近く見られ、競技者育成志向が36%弱となった(図1-A参照)。

表5 指導歴

		％
1. 3年未満	89	26.1
2. 3～6年	69	20.2
3. 6～10年	77	22.6
4. 10～20年	77	22.6
5. 20年以上	26	7.6
N.A.	3	0.9
合計	341	100.0

指導の障害に關しては、指導時間が十分に取れないとの回答結果が最も高い結果となった。これは、施設利用や、指導者の生活と関連が示唆される。そして最も注目しておきたい項目として指導者自身のコーチとしての能力に限界を感じている割合が25%近くになっていることである(図1-B参照)。

JTAが発行している指導教本の項目を例に取り、指導者に最も重要と考えられる項目を答えてもらったところ、安全指導との回答の傾向が30%近い結果となり、最も高い傾向を示した(図1-C参照)。

研修会等の参加意欲に關しては、参加したいという積極的な回答が多い傾向となった。その内容としては、「スポーツ医学」「スポーツ指導者論」との内容が上位にきており指導現場においての実践的に役に立つ内容に興味・関心があるように考えられる(図1-D, 1-E参照)。

IV. JTA 指導者の指導志向別比較結果

まず初めに指導志向別の指導者の「性別」に關しては、

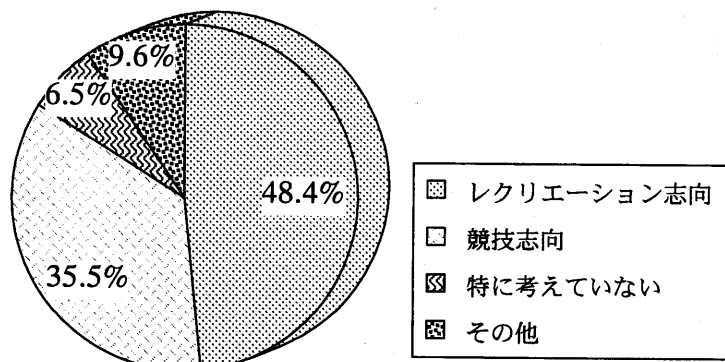


図1-A 指導志向

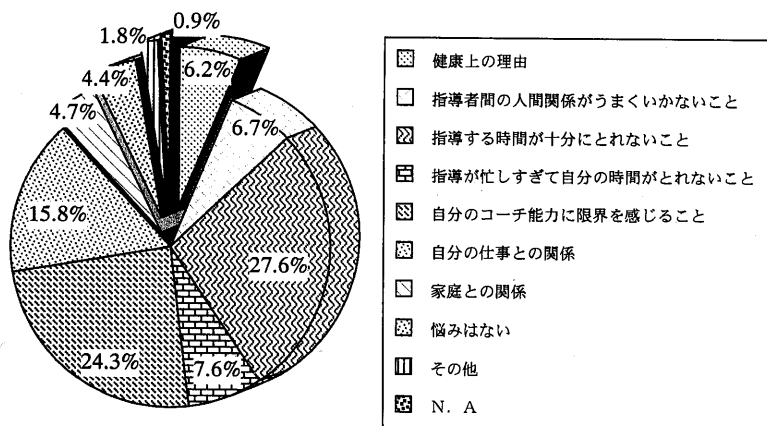


図1-B 指導の障害

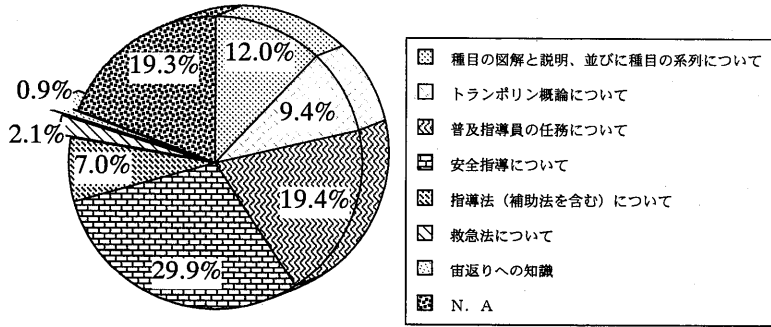


図 1-C 講習会重要項目

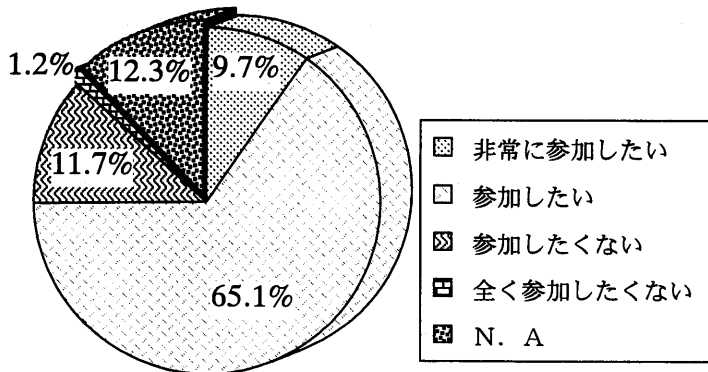


図 1-D 研修会加意欲

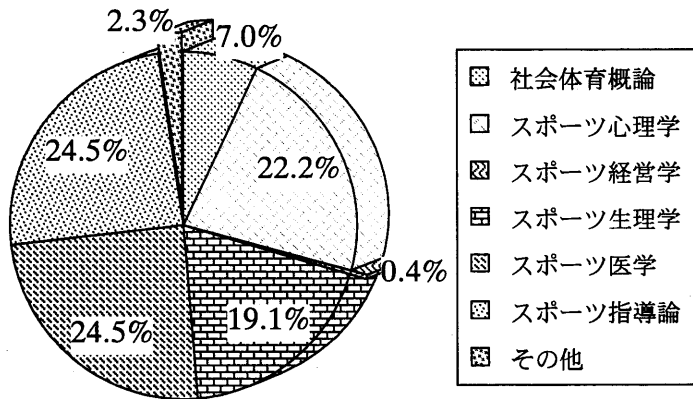


図 1-E 研修会希望内容

レクリエーションスポーツ志向での指導者において女性の割合が高い傾向を示した（図 2 参照）。このことは、「主婦」の割合が高い傾向との関連が示唆される（図 3 参照）。

「指導歴」では、レクリエーションスポーツ志向が、競技者育成志向よりも指導歴が短い傾向にある（図 4 参照）。

指導者自身の「レベル」については、レクリエーションスポーツ志向者において大会等の「出場経験ナシ」が 40% を超えていることから指導者自身の経験からも競技者育成志向的選手の育成というところまでのレベルには至っていないのではないかと示唆される（図 5 参照）。

「指導回数」に関しては、競技者育成志向で指導を行っている指導者において明らかに指導回数が多い傾向にあ

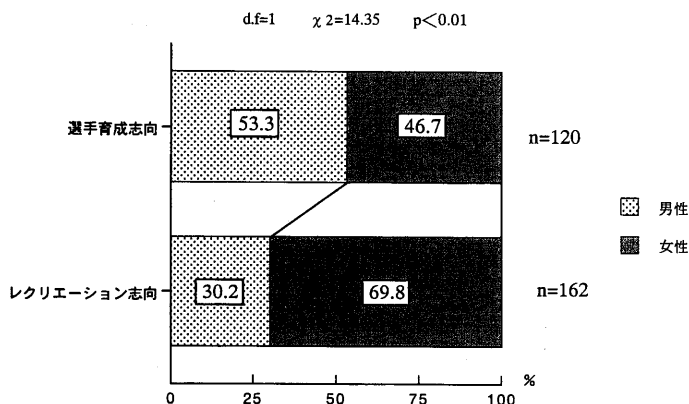


図2 性別の比較

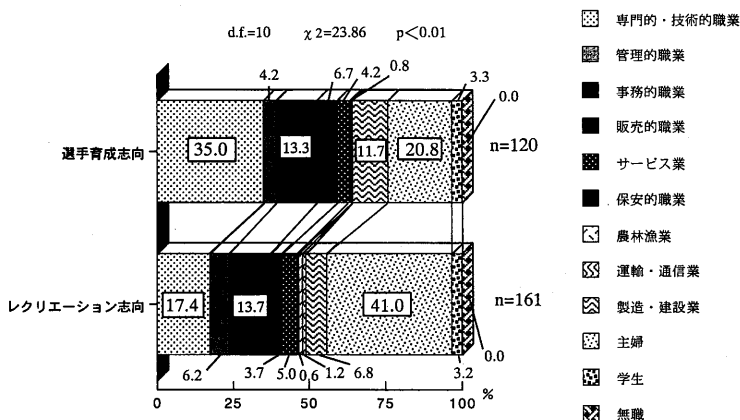


図3 職業の比較

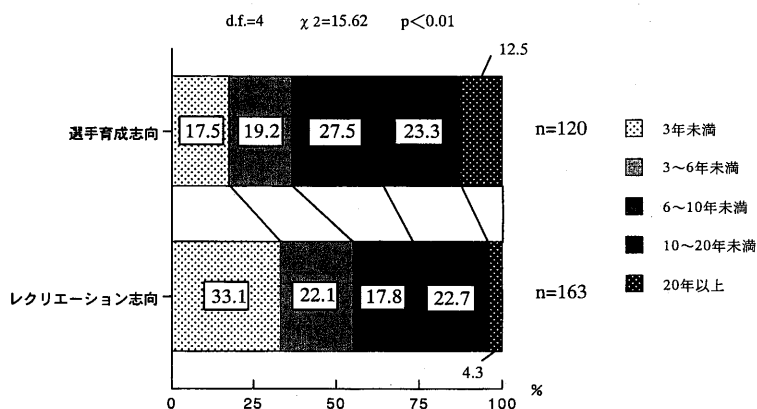


図4 指導歴の比較

り、そこでは技術の向上を目指しての指導が行われているものと示唆される(図6参照)。

指導の「対象者」に関しては、レクリエーションスポーツ志向、競技者育成志向ともに大半が「幼児・小学

生」を対象としている。ここでは、対象者的には同じ傾向を示しているものの、その指導に当たっている指導者の意識の違いによって指導の内容に違いが生じてくると示唆される(図7参照)。

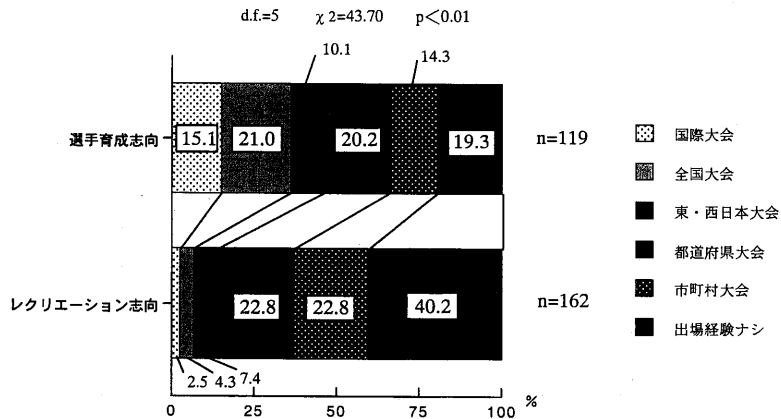


図5 指導者自身のレベルの比較

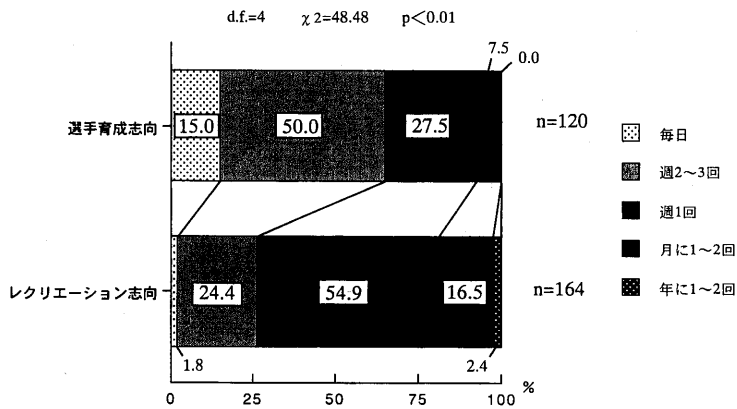


図6 指導回数の比較

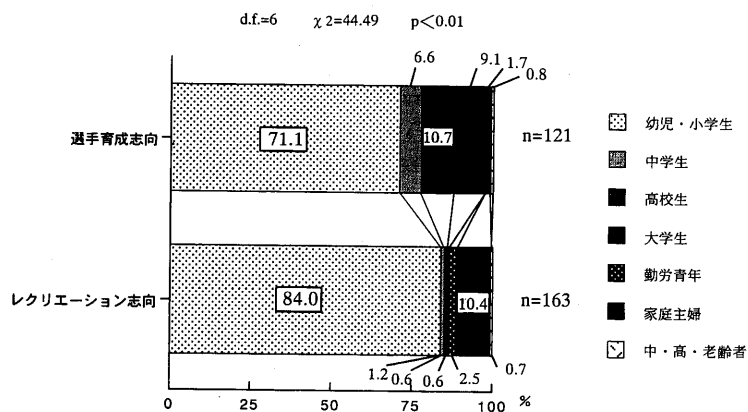


図7 指導対象者の比較

指導対象者の「レベル」に関しては、競技者育成志向の指導者の指導対象者で、大会等の出場経験が明らかに高い傾向を示している（図8参照）。

指導者の指導への「日頃の関わり方」に関しても影響

がでていると思われ、レクリエーションスポーツ志向では仕事や家庭に差し支えない範囲での指導が競技者育成志向よりも高い傾向にあり、逆に仕事や家庭に差し支えてでも指導を大切にしている傾向が競技者育成志向でレ

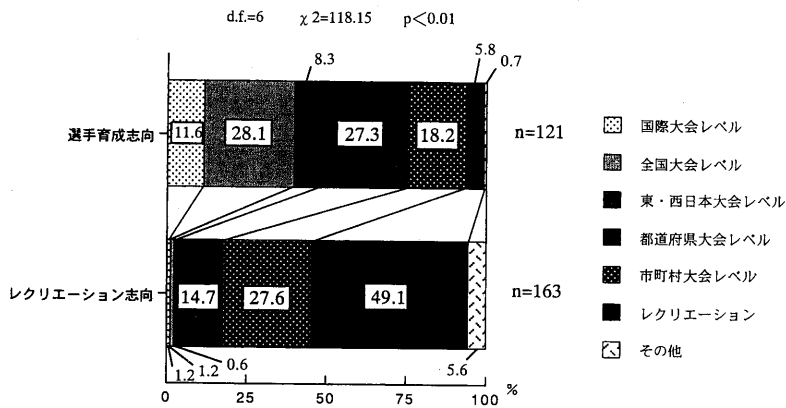


図8 対象者レベルの比較

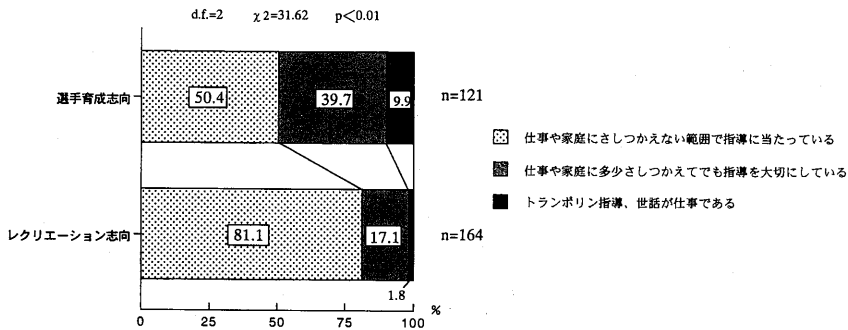


図9 日頃の関わり方の比較

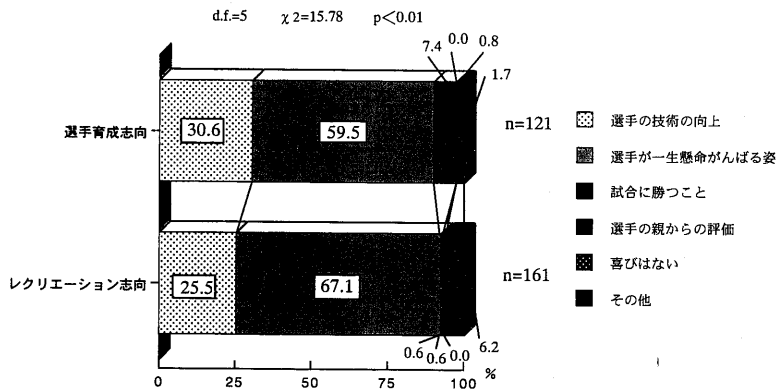


図10 指導の喜び比較

クリエイションスポーツ志向よりも高くなっている (図9参照)。

指導の「喜び」に関しては、レクリエーションスポーツ志向、競技者育成志向ともに対象者が一生懸命がんばる姿が最も多い傾向にあるものの、競技者育成志向者では、対象者の「技術の向上」、「試合に勝つこと」でレク

リエーションスポーツ志向を上回っている傾向にある (図10参照)。

指導の強調部分としてもレクリエーションスポーツ志向、競技者育成志向ともに「楽しさ」を強調した指導をしている傾向にあるもののレクリエーションスポーツ志向に対して、競技者育成志向では「技術」を重視してい

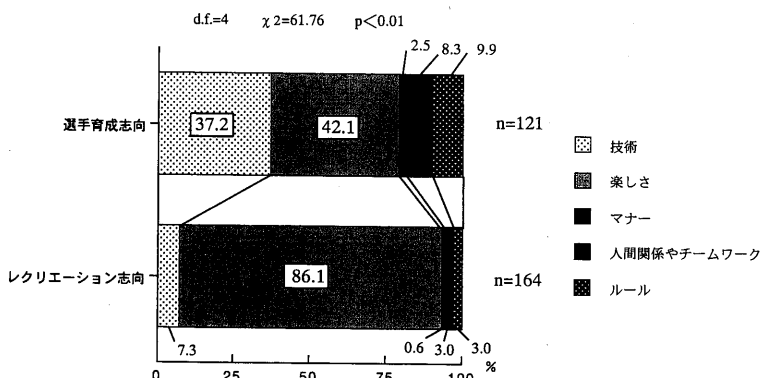


図 11 指導強調の比較

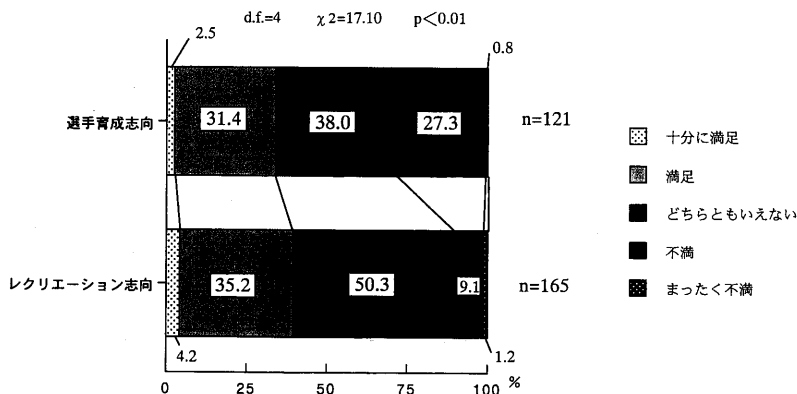


図 12 指導満足度の比較

る傾向がレクリエーションスポーツ志向よりも高い傾向を示した (図 11 参照)。

指導の「満足度」に関しては、不満傾向が競技者育成志向で高い傾向を示し、指導対象者の技術の向上、大会成績等との関係が示唆される (図 12 参照)。

V. 全体のまとめ

今回の調査の結果、大会等の出場経験が少なく競技的経験が低い指導者がクラブ等において指導を行っている傾向が明らかになった。

しかし、大会等の経験の有無は、決して「指導者」としての資質の基準の絶対的な尺度ではないと考えられる。厨が言うようにスポーツの指導者とは、「基本的には、指導者として期待される資質の内面化およびその向上に努力しようとする姿勢をもつことが極めて重要である。」³⁾と指摘しているように、指導者自らがその資質の向上に努めようとする姿勢が大切であり、今回の調査での研修会の参加意欲についての回答からもその姿勢は示

唆される。

指導志向の違いでの比較に関しては、「性別」においてレクリエーションスポーツ志向では競技者育成志向と比較して女性の指導者が多く、それに伴って主婦の割合も高くなっているものと示唆される。競技者育成志向では専門的・技術的職業の割合がレクリエーションスポーツ志向よりも高い傾向にある。これは、教員の占める割合との関連があるのではないかと示唆される。

指導日数に関しては、レクリエーションスポーツ志向では少なく、競技者育成志向では多い傾向にあり、対象者レベルに関してはレクリエーションスポーツ志向で東・西日本大会以上に出場している割合が極めて少なく競技者育成志向ではレクリエーションスポーツ志向の逆の傾向を示している。

指導の満足度に関しては、競技者育成志向でレクリエーションスポーツ志向と比較して不満傾向が高く、指導の強調部分についてもレクリエーションスポーツ志向、競技者育成志向ともに楽しさを強調している割合が

高いものの、その傾向はレクリエーションスポーツ志向で顕著に高く競技者育成志向では技術を重視した指導が行われている割合がレクリエーションスポーツ志向と比較して高い傾向にある。そこでは競技者育成志向において大会等を意識した指導が行われていると示唆される。そして、日頃の指導の関わりについても、なんらかの形で指導者の生活に差し支えてでも指導を行っている割合がレクリエーションスポーツ志向と比較して競技者育成志向で高い傾向を示し競技への熱意が示唆される。

以上のことを踏まえて指導者の養成・育成の面に関して考慮すべき点として、レクリエーションスポーツ的な指導と競技者育成的な指導とを大きく2つに分けて考えていく必要があると思われる。

まず始めに「レクリエーション」という枠の中でトランポリンの指導というものを考えた場合、池田が指摘するように「レクリエーション指導では何よりもまず、主体的な態度の中で活動に取り組み、かつ当人の活動意欲を持続させるための動機づけが、理念においても技術においても最重要の課題となる。」¹⁾「レクリエーション活動へのより主体的な取り組みを生み出させるための、不可欠の動機づけ作業がレクリエーション指導ということになる。」²⁾とモチベーションの重要性を指摘しているように、教育的な価値をも考慮して指導活動を行っていく必要があると考えられる。

また、レクリエーションスポーツ志向の指導者においては特に、指導者自身のトランポリン経験からも競技的経験がない指導者が多い傾向にある。そういった面では、指導者にとって未知的な部分、指導者自身が行ったことのない技術を指導せざるをえない状況が出てくると思われ、指導者自身のレベルを超えてしまう可能性を余儀なくされる場合があるとも考えられる。その実態が指導者の悩みでの「自分のコーチ能力に限界を感じていること」が「指導者自身の悩み」での上位に表われていると示唆される。それをカバーするためにも「指導力」を「指導論的」「スキルの」面ではもとより、より幅広く充実していく必要があると考えられる。

選手の育成に関しては、調査結果より、幼児・小学生を両志向ともにおもな指導の対象としている割合が高く、このような子どもの指導に関して糸野は「子どもの自発性・活動意欲は、条件さえ整っていれば、時が熟すれば出てくる。逆に促成栽培のように、追いたてるように刺激を与えすぎれば、子どもは萎縮し、無気力化してくるであろう。」³⁾とその危険性を指摘し、選手形成とは、「素質のある優秀な選手を発掘し、その才能を最大限に伸ばすことであり、社会学で言えば、社会化の一方法に

ほかならない。」⁴⁾と述べていることから、実際の指導現場においては、各年代別指導方法についても考慮し、練習グループの編成に関しても考慮していく必要性があると考えられる。

競技者育成志向においての指導者に関しては競技的な指導方法はもちろんのこと、技術面の強化（美の追及）というスキルの追及だけではなく、レクリエーション的な指導方法についても習得し、スキルの向上を目指した指導では特に、安全指導という面での強化、トランポリンの運動技術以外のスポーツ科学的知識も必要となると考えられる。

また、レクリエーションスポーツ志向、競技者育成志向ともに「スポーツ」を行う上での避けることのできない怪我に関する知識、それに対しての措置の方法などに関する知識の習得も必要不可欠となっていくと考えられる。そのことは、JTAでの指導教本の重要と考えている項目に関して「安全指導」が上位に上がってきている傾向から指導者自身もその必要性を実感していると示唆される。

このような現状の中で、多様な指導者講習会や研修会等の“場”の提供の必要性・重要性が指摘できる。そして、受講する指導者の資質に関するレベル分けを実施した中で、より現実的な内容での研修会の検討と指導者としての自覚に基づく積極的な参加が期待される。

その結果として、指導者の資質の向上、スポーツの指導者としての望ましい在り方となり、ひいてはトランポリンの底辺の拡大とともに競技力の向上、選手の育成・養成に繋がり、今後ますますの飛躍が期待できものと考えられる。

引用参考文献

- 1) (社)日本トランポリン協会:「要覧」, p. 16, (社)日本トランポリン協会, 1995.
- 2) (財)日本体育協会:「組織内指導者を対象とした国民スポーツの振興に関する調査報告書」, pp. 6-43, (財)日本体育協会, 1993.
- 3) 厨 義弘, 大谷喜博:「地域スポーツの創造と展開」, p. 132, 大修館, 1990.
- 4) 池田 勝, 西野 仁, 永吉宏英:「レクリエーション活動の実際」, p. 41, 杏林書院, 1987.
- 5) 同上. 池田 勝, 西野 仁, 永吉宏英, p. 42.
- 6) 糸野 豊, 佐伯聰夫編著:「現代スポーツ指導者論—その社会的見方・考え方—」, p. 140, ぎょうせい, 1988.
- 7) 同上. 糸野 豊, 佐伯聰夫編著, p. 250.
- 8) 海老原 修:「社会体育の目標と社会体育指導者に求められる要因」, 女子体育 10月号, 1989.
- 9) 上杉正幸:「わが国における一流競技選手と指導

- 者の意識のズレに関する分析」, 香川大学教育学部研究報告第I部第75号, 1989.
- 10) 日高哲朗:「社会体育指導者の課題」, 千葉体育学研究第15号, 1992.
 - 11) 荒井貞光, 東川安雄, 谷口勇一:「日体協公認地域スポーツ指導者に関するアンケートの報告(1)」, 指導者のためのスポーツジャーナル, 1992.
 - 12) 豊田一成, 豊田則成:「少年期のスポーツのあり方に関する研究—その2—」, 一スポーツ少年団指導者の意識の実態一, 1992.
 - 13) 荒井貞光, 東川安雄, 谷口勇一:「日体協公認地域スポーツ指導者に関するアンケートの報告」, 指導者のためのスポーツジャーナル, 1992.
 - 14) 福本和行, 遠藤勝恵:「地域スポーツ指導者に関する研究」, 一スポーツ・クラブ指導者に求められる条件について一, 鳥取大学教養部紀要第28号, 1992.
 - 15) 片瀬喜代次:「ニュースポーツと指導者養成」, 指導者のためのスポーツジャーナル, 1993.

トランポリン指導者の実態に関する調査

・トランポリン指導に対する現在の活動実態について

Q1 現在、指導をされている対象者の主なレベルをお答え下さい。

1. 国際大会レベル 2. 全国大会レベル 3. 東・西日本大会
4. 都道府県大会レベル 5. 市町村大会レベル 6. レクリエーション
7. その他 ()

Q2 現在、どのような人たちを最も多く対象に指導をしていますか。最も多い対象者を1つお選び下さい。

1. 幼児・小学生 2. 中学生 3. 高校生 4. 大学生
5. 勤労青年 6. 家庭主婦 7. 中・高・老年者

Q3 通常、1回の活動で指導対象者はだいたい何人ほどですか。

1. 10人未満 2. 10~20人未満 3. 20~30人未満
4. 30~40人未満 5. 40人以上

Q4 現在、どのくらいの割合で指導をしていますか。

1. 毎日 2. 週2~3回 3. 週1回
4. 月に1~2回 5. 年に1~2回

Q5 通常、1回の活動(練習)時間は何時間ですか。

1. 1時間未満 2. 1~2時間未満 3. 2~3時間未満
4. 3~4時間未満 5. 4時間以上

Q6 現在活動をしている施設は、次のどれにあてはまりますか。

1. 学校施設 2. 公共スポーツ施設 3. 職場施設
4. 商業(営利)施設 5. 民間非営利施設 6. その他 ()

Q7 あなたは、他のクラブ・チームと重複して活動をされていますか。

1. している 2. していない

Q8 通常の活動でお使いになっているトランポリンは何台ですか。

ミニトラ _____ 台
レギュレーション(ミドルサイズ) _____ 台
ゴライアス(ラージサイズ) _____ 台

Q9 日頃のトランポリンの関わり方は、次のうちどれに近いですか。

1. 仕事や家庭にさしつかえない範囲で指導に当たっている
2. 仕事や家庭に多少さしつかえてでも指導を大切にしている
3. トランポリン指導、世話が仕事である

Q10 あなたの周りの方(家族や職場の同僚)は、あなたがトランポリンの指導や世話をすることに對して、どのような態度をとられますか。

1. 理解してくれており、よく協力してくれている
2. 理解はしてくれているが協力はしてくれない
3. あまり理解がないが協力してくれる
4. 理解もないし、ほとんど協力もしてくれない

Q11 あなたがトランポリンの指導者になられたきっかけは何ですか。

1. 子供の入会の関係で 2. 社会奉仕のため 3. トランポリンの普及振興のため
4. 指導することが好きだから 5. トランポリンが好きだから
6. 押し付けられてしかたなく 7. 指導力をかわれて 8. その他 ()

Q12 あなたは、指導料をもらっていますか。

1. はい 2. いいえ

SQ1 Q14で「はい」とお答えになった方にお聞きします。その額は月々（平均）いくら程度ですか。

1. 5千円程度 2. 1万円程度 3. 2～3万円
4. 4～5万円 5. 5万円以上

・トランポリンの指導に対する意識等について

Q13 指導をするにあたりどのような意識で指導をされていますか。

1. レクリエーション志向 2. 競技志向 3. 特に考えていない
4. その他 ()

Q14 あなたが思うトランポリンの魅力、楽しさはどこにあるとお思いますか。

1. 高いストレートジャンプ
2. 安定したストレートジャンプ
3. 足の裏以外でのジャンプ（ドロップ系）
4. 基礎的な技の連続 5. 宙返り 6. 宙返りの連続
7. その他 ()

Q15 あなたは、これまでのトランポリン指導に対して全体として満足していますか。

1. 十分に満足 2. 満足 3. どちらともいえない
4. 不満 5. まったく不満

Q16 トランポリンの指導を行っていく上であなた自身に関連することで困ったり、悩みを感じることは
どういうことが最も多いですか。

1. 健康上の理由で 2. 指導者間の人間関係がうまくいかないこと
3. 指導する時間が十分にとれないこと 4. 指導が忙しすぎて自分の時間がとれないこと
5. 自分のコーチ能力に限界を感じる 6. 自分の仕事との関係
7. 家庭との関係 8. 悩みはない 9. その他 ()

Q17 トランポリンの指導をしていくのに次の4つの内容があります。あなたはどれを強調して教えていますか。

1. トランポリンの技術 2. トランポリンの楽しさ
3. ルール 4. マナー 5. 人間関係やチームワーク

Q18 あなたが指導者として感じる喜びとはどんなことですか。

1. 選手の技術の向上 2. 選手が一生懸命がんばる姿
3. 試合に勝つこと 4. 選手の親からの評価 5. 喜びはない
6. その他 ()

Q19 次の1～6の教本の主な項目の中で**重要と思われる順**に番号を並べ代えて下さい。

1. 種目の図解と説明、並びに種目の系列について
2. トランポリン概論について
3. 普及指導員の任務について
4. 安全指導について
5. 指導法（補助法を含む）について
6. 救急法について

1番	2番	3番	4番	5番	6番

Q20 今後、資格取得講習会以外の研修会が開催される場合についてお聞きします。

1. 非常に参加したい 2. 参加したい 3. 参加したくない 4. 全く参加したくない

SQ2 Q20で「1」か「2」とお答えになった方にお聞きします。

今後、講習や研修会が開催されるとして、特に受けてみたい内容は次のどれですか。

1. 社会体育概論（社会体育の基本的な考え方等）
2. スポーツ心理学（運動の効果、個人差、運動意欲等）
3. スポーツ経営学（スポーツ事業の計画と運営等）
4. スポーツ生理学（運動と筋・神経・呼吸・循環、スポーツ栄養、発育発達と運動等）
5. スポーツ医学（スポーツ傷害とその措置、スポーツと救急措置の実際等）
6. スポーツ指導論（スポーツ指導の基礎、スポーツ指導の原則等） 7. その他（ ）

・ 個人的属性

F1 性別 1. 男 2. 女

F2 年齢 1. 25歳未満 2. 25～34歳 3. 35～44歳
 4. 45～54歳 5. 55歳以上

F3 職業

1. 専門的・技術的職業（研究者・裁判官・弁護士・病院勤務者・宗教家・デザイナー等）
2. 管理的職業（管理的公務員・会社、団体の役員・管理職員・個人経営者を除く等）
3. 事務的職業（事務系会社員・事務系公務員・タイピスト等）
4. 販売的職業（小売店主・販売員・外交員等）
5. サービス業（理容師・美容師・調理師・接客業・住居、ビル等管理人等）
6. 保安的職業（自衛官・警察官・消防員・警備員等）
7. 農林漁業（植木職・造園師を含む）
8. 運輸・通信業（鉄道運転従事者・バス、貨物自動車運転者・郵便、電報外務員）
9. 製造・建設業（金属、科学製品製造者（加工作業者）・食品製造作業者等）
10. 主婦 11. 学生 12. 無職

F4 競技レベル

1. 国際大会 2. 全国大会 3. 東・西日本大会 4. 都道府県大会
 5. 市町村大会 6. 出場経験ナシ

F5 指導歴

1. 3年未満 2. 3～6年未満 3. 6～10年未満
 4. 10～20年未満 5. 20年以上

長時間のご協力ありがとうございました。